

## 初期プラトンの哲学 —魂の世話をめぐる探究—

### Plato's early works — The Search over Care of the Soul —

平野 織

Oribe HIRANO

大阪経済法科大学 21世紀社会総合研究センター 客員研究員

#### 目次

- I. プラトンの哲学と初期対話篇
- II. 『ソクラテスの弁明』——魂の世話と善く生きること
- III. 初期プラトンの課題と構え
- IV. 『メノン』——探究のアポリアと想起説
- V. 初期プラトンの哲学の道程

キーワード：魂の世話・想起説・ソクラテスの対話篇・ギリシア哲学・プラトン

#### I. プラトンの哲学と初期対話篇

前4世紀ギリシアのアテナイにおいてプラトン（前427年－前347年）は、師ソラテス（注：ソクラテス）を主人公とする対話篇を通して「イデア」や「哲人王」といった思想を唱えた。イデアは一般的に、感性的なものの原型としての超越的で絶対的な實在だとされ、哲人王は主著『国家』において現れた思想で、そこでは真実を観ることを愛する哲学者こそが国を統治すべきだと主張されている。現代の私たちからすれば、こうした思想は神秘的かつ非現実的に見える。そして実際、哲学史においては幾度となくそのように批判されてきた。そこで本論は、イデアや哲人王を唱える中期以前のプラトン、つまり初期プラトンの哲学を整理することで、プラトンの思想的動機と課題を明らかにすることを目的とする。

プラトンの師ソクラテス（前469年頃－前399年）は、僭主政や衆愚政治、ソフィストによる弱論強弁的な弁論術が広がるアテナイの衰退期において、貧乏を顧みず徳や正義など人間をめぐる事柄についてアテナイの広場で人々と熱心に対話していた。ソクラテスには「魂の世話」「善く生きること」といった関心があったと考えられる。しかし前399年、ソクラテスは有力者たちの恨みを買って、青年に害悪を与え国家の認める神々を認めなかつ

たという廉で訴えられてしまう。というのも、彼の対話は徳の探究を行うために、対話者に問いを投げかけ、次々と対話者の無知を晒すことをその特徴としていたからだった。そして裁判の結果、彼は刑死してしまう。

こうしたソクラテスに影響を受けて、プラトンは彼の死後に対話篇を書き始める。それ以前のプラトンは、『第七書簡』によれば「自分自身のことを支配できるようになりしたい、すぐにも国家の公共活動へ向かおう」(324B-C)と政治家になることを志していたが、独裁制や衆愚政治を前にして、特にソクラテスの死刑を契機として今は政治家になるべきではないと考えるに至る。そして何が善いことか、正義に適ったことかを根本から考える必要があると考えた<sup>1</sup>。こうしてプラトンは、ソクラテスの姿を描くことを通して哲学探究の道に入り、数々の対話篇を著していくことになる。真作とみなされ現存しているプラトンの著作はおおよそ30篇にのぼり、アカデメイア開設や3度にわたるシケリア旅行といった契機を前後に初期、中期、後期という3つの時期に分けられている。以下にその著作区分を示す。括弧内には、慣例上附されている副題を挿入する。

### 初期対話篇

『ソクラテスの弁明』、『クリトン』(行動)、『エウテュプロン』(敬虔)、『カルミデス』(節制)、『ラケス』(勇気)、『リュシス』(友愛)、『イオン』(『イリアス』)、『エウテュデモス』(争論家)、『プロタゴラス』(ソフィストたち)、『ヒippias (大)』(美)、『ヒippias (小)』(偽り)、『ゴルギアス』(弁論術)、『クラテュロス』(名前の正しさ)、『メノン』(徳)、『メネクセノス』(戦死者たちの為の追悼演説)

### 中期対話篇

『饗宴』(エロース)、『パイドン』(魂)、『国家』(正義)、『パイドロス』(美)、『パルメニデス』(イデア)、『テアイテトス』(知識)

### 後期対話篇

『ソピステス』(存在)、『ポリティコス』(王者の統治)、『ティマイオス』(自然)、『ピレボス』(快樂)、『法律』(立法)

こうした執筆区分については『法律』における記述スタイル、内容、文体統計学をもとにしておおよそ策定されているが、詳細な執筆時記や順序は明らかではない。そのため時代や論者によって、区分や順序が前後している場合が決して少なくない。例えば、初期の著作順序に異同が認められることや、『パルメニデス』『テアイテトス』といった著作が中期ではなく後期に区分されていることなどが挙げられる。

プラトンの哲学においてこの3つの時期にはそれぞれどのような特徴がみられるだろうか。初期において、最初期の『ソクラテスの弁明』『クリトン』では「魂の世話」をして

徳をもとに善く生きることを勧めるソクラテスの像が描かれ、それ以後の『カルミデス』『リュシス』などの対話篇では節制や友愛といったそれぞれの徳目が考察され、『エウテュデモス』『プロタゴラス』『ゴルギアス』などではソフィストに対する批判が展開されている。中期における、『饗宴』『パイドン』『パイドロス』ではエロース論およびイデア論が唱えられ、『国家』では哲人王の思想が打ち出されている。これらの思想に関しては、ソクラテスが主要な登場人物として現れているものの、ソクラテスが唱えていたとは考えられないプラトンの独自の思想であろうと推定されている。後期においては、対話の登場人物としてソクラテスに代わって、プラトンその人ではないかと推測される「アテナイの客人」などが登場するなど、ソクラテスの印象はより薄れ、『法律』に顕著に表れているように現実的な政治を論じようとするプラトンが見られる。また唯一自然や世界創造を論じた『ティマイオス』も後期に属する。以上のように、各時期はそれぞれに特徴的ではあるが、全体を通して「魂の世話」や「徳」への問題関心が基調をなしている。

冒頭に記したように、本論は初期プラトンと呼ばれる時期のテキストを扱う。初期の対話篇がしばしば「ソクラテス的対話篇」と呼ばれるように、この時期はソクラテスの実像に近いあり方を描きとろうとしていると言われている。何より特徴的であるのは、「とは何か」という問いを徹底することで諸徳の本質を明らかにしようとしながら、いずれも答えがでないまま終わる対話篇である（アポリア的対話篇）。さらに中期・後期の著作に比べてプラトンらしい積極的な提起が見られないことから、プラトン哲学にとっての「初期プラトン」の意義が見過ごされる傾向にある<sup>2</sup>。とは言え、初期プラトンには、すでにプラトンが抱えた思想的課題の萌芽が見られる。そのためこの時期のテキストを根気よく読解すること、つまりそれぞれがそれぞれに独立した対話篇を内在的に読み込み、各対話篇の連関を結ぶことによって、プラトン思想全体の動機とその展開を見てとることができる。

こうして本論は、初期プラトンに焦点をあてる。まずプラトンが最初に著したと目される『ソクラテスの弁明』を解説し（第Ⅱ章）、そのうえで初期プラトンの課題と構造を明らかにし（第Ⅲ章）、そして徳を探究する方法と初期プラトンの困難が現れている対話篇『メノン』へと進む（第Ⅳ章）。以上をもって初期プラトンの哲学的意味を明らかにしたい（第Ⅴ章）。

## Ⅱ. 『ソクラテスの弁明』——魂の世話と善く生きること

プラトン最初の対話篇『ソクラテスの弁明』は、ソクラテスが流神罪でアテナイの法廷に訴えられ、市民陪審の前で弁明する姿を描いている。記述は、有力な政治家アニュトスという後ろ盾をもつ原告のメレトスが論告・求刑弁論をすでに終えて、ソクラテスが語るところから始まり、死刑を宣告されたのち有罪・無罪の票を投票した人々へそれぞれ語る場面で終わる。

ソクラテスが訴えられた宣誓口述は次のようなものだ。「ソクラテスは罪人である、青年に対して有害な影響を与え、国家の認める神々を認めず、別の新しいダイモンのたぐいを祭るがゆえに」(24B-C)。しかし、これは真実ではないとソクラテスは反論する。メレトスによる訴えが行われた背景には、アテナイの政治家や詩人や手工者などによるソクラテスへの中傷や嫉妬があるのであって、そうした中傷が生じた原因にこそ弁明する必要があることを説く。そのため、中傷を目的とするメレトスに対しては、ソクラテスは真面目には取り合わず詭弁的ともとれる論理で弁明を行っており、ソクラテス特有の皮肉さが見てとれる(24B-28A)<sup>3</sup>。

メレトスの訴えの発端となった中傷とは以下の通りである。「ソクラテスは犯罪者である、彼は天上地下のことを探求し、弱論を強弁するなど、いらざるふるまいをなし、かつ、この同じことを他人にも教えている」(19B-C)。これはソクラテスを危険なソフィストとみなすもので、似たような文言が同時代のアリストパネスの戯曲『雲』にも見られる。借金から切り抜けようと弁論術を学ぼうとするストレプシアデスは、ソクラテスの居る小屋を見て息子に言う。「これは賢明なる魂の道場だよ。そこには空は窯でこれがわしらを取りまいていて、わしらは炭だ、とこう言って納得させようとする人たちが住んでいるのさ。金を払いさえすれば、この人たちは弁論で、正しいか正しくないかおかまいなし、勝つ術を教えてくれる」<sup>4</sup>。ここに端的に言われているように、ソフィストとみなされたソクラテスは、①ギリシアの信じる神々を信じずに自然現象や人間について、いわゆる自然科学的な論拠で説明し、②金銭を受け取って、真実かどうかに関係なく議論に打ち勝つ弁論術を教える、このような人として評価されている。しかしソクラテスは、こうしたことは理解がつかないし、金銭を受け取って人間教育をする事実はないとする。またゴルギアスやプロディコス、ヒッピアスなどといった名だたるソフィストは「一国の市民として持つべき徳」(20B)を知る「人間なみ以上の知恵をもつ知者」(20E)かもしれないが、ソクラテス自身は「人間なみの知恵」(20D)しかないのだと言う。このようにソクラテスは自身がソフィストであることをまず否定する。そして、こうした中傷を受けるようになった理由を説明し始める。以下は、デルポイのお告げと無知の知についての有名なエピソードである。

ことの起こりは、ソクラテスの友人カレイポンがデルポイの神殿へ行き、ソクラテスよりも知恵のある者がいるかどうかを訊ねたことにある。そして、デルポイの巫女は、ソクラテスより知恵のある者は誰もいないと答えた。ソクラテス自身は知恵のある者ではないと自覚していたのに、その自分をいちばん知恵があると宣言することで、神は何を言おうとしているのかと、彼は考えこんでしまった。そこでソクラテスは、知恵があると思われる者のところへ訪ねることを始めた。そうすれば、ことの真偽がわかるであろうと考えたのだ。そして、政治家、詩人、手工者のもとへそれぞれ赴き、彼らを相手に問答しながら仔細に観察しているうちに、彼らは善や美についての事柄について知恵があると自分で思っているが、実はそうでなく何も知らないのだ、ということがわかってきた。彼らが

そうして無知であることを晒し、彼ら自身にわからせようとつとめた結果、その相手やその周りにいた多くの人たちにも憎まれることとなってしまった、という。しかしソクラテス本人は、自身がそれらの事柄を知らない、ということを知っている。そこでソクラテスは自らに結論付ける、「わたしは、知らないことは知らないと思う、ただそれだけのことで、まさっているらしい」(21D)と。そして、神託に代わって自らに問い直し、このままでは自分が自分のためにいいのだ、と判断したのだった。今でもソクラテスが、街を歩きまわり知者と思われる人と対話をしているのは、そう思っているかもしれないが実は知者ではないということを明らかにしているからだという。そうしているうちに、若い者もソクラテスの真似をして他の人を調べあげるようなことになり、何か知っているつもりで、その実、わずかしかならないか何も知らないという者がたくさんいることを発見したのだという。そこで、無知を暴露された人たちは腹を立てて、組織的かつ説得的に、ソクラテスについての猛烈な中傷を行いアテナイ市民の耳を塞いでしまったのだ。そのために、ソクラテスは危険なソフィストであるという事実でないことが広まってしまい、ついにメレトスやアニュトス、リュコンに訴えられたのだという。

そしてソクラテスはこのように言う。「わたしは、アテナイ人諸君よ、君たちに対して切実な愛情をいだいている。しかし君たちに服するよりは、むしろ神に服するだろう。すなわち、わたしの息のつづくかぎり、わたしにそれができるかぎり、けっして知を愛し求めることをやめないだろう。わたしは、いつだれに会っても諸君に勧告し、言明することをやめないだろう」(29D)。評判や地位や身体や金銭のことばかりを気にするとは恥ずかしいことで、思慮や真実や魂をできるだけすぐれたものにするということ(魂の世話)にこそずいぶん気を使うべきだ、とソクラテスは説く。もし異議がある者があれば、それは老若問わず、これに問いをかけて吟味するだろうという。人間にとっての最大の善きこととは、「徳その他のことについて毎日談論する」(38A)ということにあるのだ<sup>5</sup>。

以上のように、ソクラテスは、自身が徳や魂の世話について語るのは人々が実は無知であることを「神の命」(28E)に従って明らかにするためだとして、裁判を無罪で切り抜けようとして弁明を終える。彼は習慣上行われる自らの家族による哀訴嘆願や裁判官に対する収賄を不要としつつ票決を迎え、僅差で有罪が確定し、ついで死刑が票決される。そこで無罪投票した人々へソクラテスは、この件でダイモンの差し止めがなかったため、この死刑を受けることは自分にとって善いことだったと語る。よく知られるソクラテスのダイモンとは、ソクラテスが何かをしようとしている際に、一種の声となってそれをソクラテスに差し止める合図として現れるのだという。そのダイモンの合図がなかったということとは、死ぬということが善い希望があるということだと、ソクラテスは考えたのである<sup>6</sup>。



### Ⅲ．初期プラトンの課題と構え

#### 1. 徳とは何か

『ソクラテスの弁明』で描かれた裁判は、史実通りのソクラテスであるか確認することはできないが、プラトンはここでプラトンなりにソクラテスの生き方を描きあげた。名誉や地位や身体や金銭のために、あるいはただ単に生きるよりは、魂の世話をして善く生きるべきだと、ソクラテスが考えていたこと。これをプラトンは彼から受け取ったのだ。もちろんこの背景には、プラトンが政治家を志していたことや、彼がつぶさにみた僭主政や衆愚政治に嫌気がさしていたこと、この政治について哲学原理によって解決したいという意図があったことは確かである。しかし、善く生きるとはどのようなことか。そして徳とは、私たちが通常考える「道徳」という意味ではなくて卓越性や有能性などを意味するが、そもそも徳（ἀρετή）とは何か。この徳の本質をはっきりさせなければ、「人生をいかに生きるべきか」という重要な問題が解決されないとプラトンは考えた。

例えば、真偽や詳しい著作時期の判断はつけがたいが初期の作品と考えられている短編に『クレイトポン』がある。この対話篇は「徳へのすすめ」と副題されているように、ソクラテスの哲学を端的に言い表している。ソクラテスの批判者として登場する政治家クレイトポンは、ソクラテスによって徳へのすすめを説かれ感銘を受けたとしても、そのあとに具体的な解決への道筋を示してくれなければ、このすすめは「徳の完成に達し幸福を得るということのためには、ほとんど邪魔だと言ってもいいぐらいのもの」（410E）だと喝破する。この対話篇は、その後のソクラテスの反論がないままに閉じられる特殊な作りのため、真作かどうかははっきりしないのだが、真偽にかかわらずこの対話篇の意義は大きい。クレイトポンが言うのは、徳の本質を見極めず「徳のすすめ」を題目にするだけでは意味がなく害悪ですらある、といった辛辣な批判である。

徳の内実や本質が明らかにされなければ、「いかに生きるべきか」（『ゴルギアス』492D）という重要な問いに対して、ソクラテスが魂の世話をしながら善く生きることだと実践的に答えたことの意義が失われてしまう。こう考えておそらく、『ソクラテスの弁明』を書き終えた初期のプラトンは、「とは何か」という問いの形式をとって諸徳の本質を探ることに進んだ。この時期に扱われている諸徳には、「正義」「勇気」「節制」「友愛」「敬虔」「知恵」などが挙げられている<sup>7</sup>。しかしこうした初期の対話篇において、諸徳の本質の探究は、アポリアのうちに終わる。それぞれの対話者が、ソクラテスに問われて答えていくが、ソクラテスはことごとく反論していく。そして結局、その本質がわからないままに対話は終わってしまう。しかしこうした初期の対話篇における、ソクラテスの無知の知による優位、アイロニー、空とぼけと呼ばれる対話の方法は、知の探求の無意味さを表しているのではない。結果的にはアポリアのうちに終わっているが、その探求過程を確認してみると、そこに徳全体としての「善い」がつねに目指されていることがわかる<sup>8</sup>。

それぞれの諸徳——正義、節制、知恵、勇気、敬虔、友愛など——が、徳として可能になっている徳の本質の探究について、つまり初期プラトンの到達点とも言える探究については、次章の『メノン』において確認する。

## 2. 問う方法の批判

次章へ移る前に、ソクラテス＝プラトンの探究における方法を確認しておきたい。この方法は、対話法（διαλεκτική）と呼ばれており、プラトンの著作全体に異同をもちながら通底している。それは、ソクラテス＝プラトン以前に現れていた知者の批判を通して確立されてきたものと考えられる。プラトンの批判は、おおよそ自然哲学者、詩人、ソフィストという3つの類型に向けられている。

まず自然哲学者たち。これはおおよそイオニア自然哲学が想定されているものと思われる。前章においてアリストパネスの『雲』を引いたように、自然哲学は、自然現象を、従来のように神にかかわるものとして説明するのではなく、現在の科学のように因果において説明しようとする。人間は炭でできている、月は土でできている（『ソクラテスの弁明』26D）と。プラトンはしばしばそうした論者としてアナクサゴラスの名を登場させている。こうした説明は、神の意図から説明するより、多くの人にとって説得的である。しかし、この語り方は「にすぎない」というニュアンスをもっている。「人間はいかに生きるべきか」という探究を行うにあたって、人間を相対化してしまい、十分な探究にならないことが自然哲学のデメリットだとプラトンは考えたに違いない<sup>9</sup>。ここでは人間の価値が軽んじられ、「善い」ということが語れないとみなされている。それに比べれば、詩人やソフィストは、「いかに生きるべきか」という人間の価値の部分、言語や文化の部分にアプローチする方法とみなされていることがわかる。プラトンの著した対話篇において、自然哲学に対する言及よりも、詩人やソフィストに対する批判的言及が多いのはこのためだ。

詩人やソフィストに対しての批判は、基本的には、前章でソクラテスが示したように「無知の知」という観点から行われている。そしてその批判は、プラトン哲学全体を通して見られるソフィスト批判、詩人批判の原型をなしている。初期の著作では、詩人批判としては『イオン』が、ソフィスト批判としては『プロタゴラス』『ゴルギアス』『エウテュデモス』が挙げられる。

吟唱詩人イオンと対話する『イオン』では、『ソクラテスの弁明』における詩人に対する以下の批判が反復され、そのことが主題とされている。「彼らがその作品をつくるのは、自分の知恵によるのではなくて、生まれつきのままのものによるのであり、神がかりになるからなのであって、これは、神の啓示を取り次ぎ、神託を伝える人たちと同じようなものなのだ（…）。なぜなら、この人たちも、けっこうなことをいろいろとたくさん口では言うけれども、その言っていることの意味は何も知っていないからです」（22B-C）。

さてホメロス『イリアス』『オデュッセイア』やヘシオドス『仕事と日々』『神統記』などの作品は、ギリシアにおける神話を語ったものであり、「人はいかに生きるべきか」という問いに対する参照先として古くから当時のアテナイで認められていた。当然その詩句を作る作者やそれを吟じる吟唱詩人は、語られていることの真意たる「善い」「徳」の本質を知っているものとみなされ、尊敬の対象とされている。しかし、実際にソクラテスが吟味してみれば、詩人たちは「神がかって」吟唱でき人々に感動を与えるが、語られていることの内実を知っていい吟唱しているわけではない事が発覚する<sup>10</sup>。むしろ、人からの賞賛や金銭の方をより配慮していることが暗示されている（535E）。

最後に「弁論術」についてという副題をもつ『ゴルギアス』では、有名なソフィストであるゴルギアスとの対話が描かれソフィストの性格を描写している。しかしここでのゴルギアスは、ソフィストの文体を作りあげた史実のゴルギアスというよりは、「ソフィスト」全体を象徴化した存在として描かれているとみなすほうが妥当であろう。さて、対話篇におけるゴルギアスは弁論術が、人間にかかわるなかで最重要かつ最善であるものであり、かつ正しいことや不正なことについて言論によって人々を説得する能力であるとしている。にもかかわらずその一方で弁論術が、知識をもたらず説得ではなく、正と不正を無知なる大衆に単に信じこませる説得であるとし、さらに弁論する当の事柄そのものについては知っている必要はないとしている。ソクラテスにとっては、正や不正や美醜や善悪などの事柄そのものについて知らなければならないために、知そのものをもたなくてもよいとするソフィストの弁論術とは受けいれられるものではない。そのためソクラテスは、弁論術をもはや技術ではなく「迎合」という経験でしかないと批判することになる<sup>11</sup>。

### 3. 哲学・対話という方法

プラトンは、自然哲学者でもなく詩人でもなくソフィストでもなく、彼らに対置させるかたちで「対話法」という方法に象徴される哲学探究を目指した。「とは何か」という問いによる問答がそれをなすが、初期や中期の対話篇はそうした対話による探究の実践とみることができる。対話法の条件が大きく取りあげられていると言えるのは、『ゴルギアス』である<sup>12</sup>。ここでは、幸福や「人はいかに生きるべきか」という問題と絡み合った正と不正を巡る対話において、有名なソフィスト・ゴルギアスと、その弟子ポロス、若手の政治家カリクレスの3人と、ソクラテスとが次々と議論を交わしていく。いずれの対話者もソクラテスに遠慮をしたり、言い負かされそうになって思ってもないことを口にし、そのことによって議論が矛盾に陥ってしまう。そこで3人目の対話者カリクレスが出てきて、ソクラテスの議論に反駁した上で、年をいっているのに哲学をしていることは滑稽だから、教養のための範囲内でちょっと携わる程度にして政治に携わるべきだとソクラテスに勧告する。するとソクラテスは上等な試金石を発見したと喜び、探求のための条件として、「知識」「好意」「率直さ」の3つを挙げる。「魂が正しい生活を送っているか否かを、



十分に吟味しようとするなら、ひとは3つのものを——つまり、知識と、好意と、そして率直さとを、具えていなければならないと、ほくは思うのだが、君はそれらを3つとも、全部具えている」(487A)。まず賢く「知識」がなければ物事のつながりを見て取ることができず、また言われていることの意味を理解することができないことを意味するので、そもそも吟味することがかなわない。次に相手への「好意」がなければ、相手のことを思いながら本当のことを言おうとしないことになる。そこからは、相手と本質の探究をしようと努めていないことが帰結してしまう。例えば、探求する事柄の真理そのものには関心をもたず、議論に勝つためだけに出し抜こうとしたりすることになるのだ。初期対話編では、ソフィストに対する批判を主な眼目としているためか、何事かを人より知っていると自負し自惚れているソフィストが対話者として現れてくる。彼らは、ソクラテスとともに真理を探究する気がもともとないために、言葉の相対主義的な性格を利用して白を黒と言いくるめようとしたり、たびたび矛盾に陥れば腹を立てて率直さを失ってしまう<sup>13</sup>。最後に「率直さ」は、遠慮してしまうことで議論が進まなくなることを避ける。率直さがないとは、例えば、間違っていることを指摘することは相手の面目を潰すようで悪いと憚ってはっきりと指摘できないことが挙げられよう。初期の対話者は、ソクラテスにあきれて議論を途中で切り上げようとして、自己の納得が伴わなくても同意を与えることがしばしばある。しかし、対話法による真理探究は、対話者同士の同意によってこそ進展していく。

そこでもう1つの条件を付け加えるなら、一問一答というスタイルがある。ゴルギアスの弟子ポロスは、問いに対して長演説で応答する。その結果、一同にさまざまな概念や問題箇所が現れ、探究は煩雑となってしまう。そのため、ソクラテスは細かいことでもひとつずつ相手と確認していきながら、真理を確定していく。途中で議論が矛盾に至り間違っていることが互いにはっきりしさえすれば、ソクラテスは間違いに至った原因の手前まで戻って、そこから再び対話を開始し、真理に至ることを目指す。

こうした探求においては、答えがはっきりしない限り対話は無限に続くこととなるが、プラトン自身が確信を抱いていない場合は何らかの物語的な演出によって対話編を閉じる必要がある<sup>14</sup>。問いに明瞭な答えが与えられていない場合、突然訪れるこうした終幕に読者は煙に巻かれたという印象を受けるかもしれない。これが初期対話篇に多く見られる印象なのである。しかし、未解決に終わった問題もその後の対話篇では発展的に解決されている場合があり、対話篇同士の連絡を確認することができるものがある。プラトンの対話篇はそれぞれが独立したテキストであり、プラトン自身の包括的な言明は晩年の『第七書簡』を含めた書簡にしか存在しない。それゆえに、プラトン自身の意図やその思想的な意義は、それぞれの対話篇の内在的読解とその積み重ねによって推論していくしか方法がないのである。そうした主体的な読解の要求が、論者によってさまざまな表情を変えるプラトンを絶対的に出現させ、多義的なプラトン読解の可能性を広げ、そのつどそのつどの困難を生じさせているとも言える。

#### Ⅳ. 『メノン』——探究のアポリアと想起説

プラトンの初期対話篇と中期対話篇の過渡期的作品と目されている『メノン』は、慣習上「徳について」という副題が与えられている。それまでの初期対話篇、『ラケス』や『カルミデス』では勇気や節制などのそれぞれの徳目の本質を取り出すことが目指されてきたが、いずれも納得のゆく回答が得られないままアポリアに終わる。初期のおおよそ終わり近くに著されたであろう『メノン』では、ついに「徳とは何か」と問うており、ある意味初期のプラトンがもつに至った限界が現れている。では、この対話編はどのように進んでいくのだろうか。

冒頭からテッタリアの有力な貴族の青年メノンはソクラテスに問いかける。「人間の徳性というものは、はたしてひとに教えることのできるものであるか。それとも、それは教えられることはできずに、訓練によって身につけられるものであるか。それともまた、訓練しても学んでも得られるものではなくて、人間に徳がそなわるのは、生まれつきの素質、ないしはほかの何らかの仕方によるものなのか」(70A)と。ソクラテスは、徳が何であるかさえ知らず、その知らないことを自分自身に対して非難している状態だと返答する。そして「何であるか」(本質)を知らずして「どのような性質のものか」ということも知ることはできないのだとして、本質と性質を区別したうえで、本質を問う必要があると言う。ここでさっそく問いは、徳の性質に対するメノンの問いから、徳の本質に対するソクラテスの問いに切り替わっている。

そこでメノンは、ソクラテスの「徳とは何であるか」という問いに得意げに答える。「男の徳とは何かとおたずねなら、それを言うのはわけないこと、つまり、国事を処理する能力をもち、かつ処理するにあたって、よく友を利して敵を害し、しかも自分は何ひとつそういう目にあわぬように気をつけるだけの能力をもつこと、これが男の徳というものです。さらに、女の徳はと言われるなら、女は所帯をよく保ち夫に服従することによって、家そのものをよく斉えるべきであるというふうに、なんなく説明できます」(71E)。このようにメノンは、それぞれの働きと年齢に応じた、なすべき仕事のために各人相応の徳があると主張する。

しかしソクラテスは、徳の本質をたずねているのに、徳の性質をさまざまに挙げることになってしまっていると指摘し、そのうえで「ある1つの同じ相(本質的特性)」(72C)に注目して「まさに徳であるところのもの」を明らかにする必要があると再度問い返す。それを聴いてメノンは「人々を支配する能力をもつこと」(73D)、「美しいものを欲求し獲得する能力があること」(77B)だと続けざまに答えていくが、ソクラテスによって「徳とは善きものを正義をもって獲得できることだ」(79B)と言いまとめられる。しかし、この正義とは、徳の部分のひとつであり徳の本質ではないとして、退けられる。したがってあらためて「徳とは何であるか」という問いからはじめなければならない。

ここでメノンは、「何をあたなに答てよいのやら、さっぱりわからない」(80B)という

状態に陥って困惑する。そのことがらを可能にしている本質を問い確かめることは、おそらく容易なことではない。こうして彼は、自らと他人をこうしたアポリアに至らせるソクラテスを「シビレエイ」(80A)にそっくりだとして揶揄する。そして、ここで彼は1つのパラドクスを指摘する。これは一般に探究のパラドクスと呼ばれている。ソクラテスの要約ではこうだ。「人間は、自分が知っているものも知らないものも、これを探究することができない。というのは、まず、知っているものを探求するということとはありえないだろう。なぜなら、知っているのだし、ひいてはその人には探究の必要がまったくないわけだから。また、知らないものを探究するということもありえないだろう。なぜならその場合は、何を探究すべきかということも知らないはずだから」(80E)。これは、おそらくメノンが答えに窮してソクラテスに一矢報いようとして発言したものと考えられるが、このパラドクスの意味は深刻だ。というのは、徳の探究がことごとく失敗し、徳の本質を発見できないでいるとすれば、そもそも徳の本質というものは存在しないのではないか、という相対主義的あるいは懐疑的な疑義が生じてくるからである。徳の本質を明言できないものの、その探究の意義を肯定するため、ソクラテスはいわゆる「想起説」を次のように提唱する<sup>15</sup>。

人間の魂は不死なるものであり、人は死んでも魂が減びてしまうことはなく、何度も生まれ変わって「いっさいのありとあらゆるものを見てきているのであるから、魂がすでに学んでしまっていないようなものは、何ひとつとしてないのである」(81C)。そのため、以前知っていたものを魂は思い起こすことができるし、探究や学ぶということは、実は想起にほかならない。ある神職からソクラテスが聞いた、という間接的な経路をとって、魂の不死という思想がここでプラトン哲学に初めて現れる。すべてのことを生前のうちにあらかじめ経験しているので、今生において今知らなくてもそれを思い起こすことで知ることができる。この説は、探究への意欲を鼓舞する。

そうしてあらためてソクラテスは「徳とは何であるか」という問題に取り組もうとメノンに促し、ギリシア人従者の少年に対して幾何学問題の想起実験を行う(82B-85B)。ここで明らかになるのは、ものを知らない人の中にも、彼が知らない当の事柄に対する正しい思惑が内在しており、ただ質問した結果として、この子は自分の中から知識をふたたびとりだし、知識をもつようになるのだ、ということだ。メノンは、完全に得心したようではないが「なるほどと思わせるものがあるようだ」(86B)と返事をして一応の議論は進んでいく。

しかしながら、徳の本質に対する探究は可能だと認められるところまでで議論は中断してしまう。このことは、プラトン自身がこの段階で自ら答えることができなくなった地点を示している。そして話は急遽転じて、徳がどのような性質であれば、それを教えることができるか、というメノンの元来の問いに答えようと仮説法による再出発が行われる。ここでは、徳が知識であれば、明らかに教えることができるし、知識とは異なる善であるとしても、それは有益なものでありそうである以上、1つの知であるとして教えることがで

きることになる、と主張される。ここで解決するかに見えて、しかし実際に教える教師と弟子が見出されなければならないが、ソフィストや立派なアテナイ人を見てみても、いずれも徳に関してすぐれた者にはなっていないということが示され、結局「徳は教えられることができないものだ」(94E)ということが事実として現れてしまう。

こうして徳は教えられないものだ、という結論に行き着いたが、ソクラテスは再考する。正しく導くということは「知」がなければならないのだ、と考えているのが間違いであるとして、知ではないが「正しい思わく」(97B)であっても、思うところが真実をついているというその状態のままで、導き手としては劣ることがないとする。正しい行為を導くのは知と正しい思わくなのだ。「正しい思わくというものも、やはり、われわれの中にとどまっているあいだは価値があり、あらゆるよいことを成就させてくれる。だがそれは、長い間じっとしていようとせず、人間の魂の中から逃げ出してしまうものであるから、それほどたいした価値があるとは言えない——ひとがそうした思わくを原因（根拠）の思考によって縛りつけてしまわないうちはね（…）。こうして縛りつけられると、それまで思わくだったものは、第一に知識となり、さらには永続的なものとなる。（…）知識は縛りつけられているという点において、正しい思わくとは異なるわけなのだ」(98A)。

ここで1つの結論が導き出される。すぐれた人物は、知識や正しい思惑によってそうなのだとすれば、それらは生来的にそなわったものではないことがわかる。そして徳とは教えられるものでも知でもないが、少なくとも善きものであり、正しく導く者は有益なもの、善きものであるのだ。特に政治家は、思惑のよさとともに、神がかりであるのである。それゆえに徳をそなえる人々とは、知性とは無関係に神の恵みによってそなわるものなのだろう。こうしてメノンが発した問いは結論が一応は出されているが、ソクラテスは「これについてほんとうに明確なことは、いかにして徳が人間にそなわるようになるかということよりも先に、徳それ自体はそもそも何であるかという問いを手がけてこそ、はじめてわれわれは知ることができるだろう。だがいまはもう、そろそろぼくは行かなければならない」(100B)と言って去り、対話篇『メノン』は閉じられる。

## V. 初期プラトンの哲学の道程

イデアや哲人王といった思想を唱えたプラトンは、ソクラテスの死をきっかけに対話篇を書き始めた。ソクラテスは「人はいかに生きるべきか」という問いに「魂の世話をしながら善く生きるべきだ」と答えた。そのソクラテス像をプラトンは『ソクラテスの弁明』において描いた。そしてその後、「善く生きる」とはどのようにして可能かという問いを立て直し、「徳」に定義を与えることを目指して、自然哲学者や詩人やソフィストとしてではなく、対話を行う哲学者としてその可能性を取り出そうと進んだ。これが初期プラトンの動機をなすものであり、以後の中期や後期においても基本的なモチーフは貫徹されていると考えられる。

しかし、初期の道程において、徳の本質に対する問いは、「知」という伝達可能なかたちで明らかにならず、アポリア的対話篇を重ねることとなった。そこでプラトンは、徳の本質は探究できないのではないかという疑義を表す探究のアポリアを意識し、『メノン』において自問する。そこで一応解決を見た方法とは、魂の不死という前提によって想起説を採ることであり、そうして徳の探究は継続して行うことが可能だ、という結論を見た。その後のプラトンは、徳の探究を目指して、エロースやイデア、さらに発展して哲人王といった思想を打ち出していくことになる。

最後に徳の探究と想起説について述べておけば、おそらくプラトンは、パラドクスが招く相対的で懐疑的な傾向を警戒し、人々の共通性や普遍性を確保するために魂の不死という前提を導入し想起説を採用したと考えられるが、現在の私たちからすれば、プラトンのようにこれを前提とすることはできない。それでもなお想起説がもつ思想的意義に目を向けるならば、徳の探究とは、人々の日々の生活におけるそのつどそのつどの経験において、意識的あるいは無意識のうちに看取され形成されたものをもとに省察し深めていくことで行われうる、と言えるだろう。その探究においては、『ゴルギアス』で提示されていた対話法における条件、つまり知識、好意、率直さが必要となってくるはずだ。

本論では都合上、『メノン』と並ぶ初期の重要な対話篇『ゴルギアス』の主要な議論を取りあげることができなかった。正と不正、幸福と不幸といった「魂の世話」にとって欠かすことができないテーマについて『ゴルギアス』読解を今後の課題としたい。

## 参考文献

プラトンの著作については以下の文献を参照し、引用の際には（ ）内に、慣習上ステファヌス版全集におけるページ数および段落づけと対応するアルファベットを記した。

『プラトンⅠ』田中美知太郎責任編集、世界の名著、中央公論社、1966年。

——「ソクラテスの弁明」田中美知太郎訳、「クリトン」田中美知太郎訳、「リュシス」生島幹三訳、「ゴルギアス」藤沢令夫訳、「クレイトポン」田中美知太郎訳。

『プラトン全集』田中美知太郎・藤沢令夫編、岩波書店。

——第2巻「クラテュロス」水地宗明訳、1974年。

——第7巻「ラケス」生島幹三訳、1975年。

——第10巻「イオン」森進一訳、1975年。

——第14巻「第七書簡」長坂公一訳、1975年。

『プロタゴラス』藤沢令夫訳、岩波文庫、岩波書店、1988年。

『ゴルギアス』加来彰俊訳、岩波文庫、岩波書店、2007年。

『メノン』藤沢令夫訳、岩波文庫、岩波書店、1994年。

『国家』藤沢令夫訳、全2巻、岩波文庫、岩波書店、2008年。

『パイドロス』藤沢令夫訳、岩波文庫、岩波書店、1967年。



---

## 注

- <sup>1</sup> 「わたしは、初めのうちこそ公共の実際活動へのあふれる意欲で胸いっぱいだったと  
はいうものの、それら法習の現状に目を向け、それらが支離滅裂に引きまわされてい  
るありさまを見るに及んでは、とうとう目眩がしてきました。それでわたしは、直接  
それらについてだけではなく、広く国制全体についても、いったいどうすれば改善さ  
れるだろうかと、考察することは中断しはしなかったけれども、しかし实际行动に出  
るについては、いつも好機を期して、控えているよりほかはなかった。(……) それ  
とともにわたしは、国政にせよ個人生活にせよ、およそそのすべての正しいあり方と  
いうものは、哲学からでなくしては見きわめられるものではないと、正しい意味での  
哲学を称えながら、言明せざるをえませんでした」(325E-326A)。
- <sup>2</sup> こうした事情については加藤信朗『初期プラトン哲学』(東京大学出版会、1988年)  
に詳しい。
- <sup>3</sup> 青年のことに関心がないとソクラテスが言う、メレトスに対する反駁は3点ある。第1  
に、メレトスはソクラテスとの対話を通して、ソクラテス以外のアテナイ人すべてが  
立派な善い人間を作ると明言するが、しかしソクラテスだけが害悪を与える程度なら  
ば、そもそも訴える必要がない。第2に、自分が近くに居る人に悪影響を与えたら、  
その人から逆に自分が悪影響を受ける危険があることを知っているから、悪い影響を  
与えていたとしても故意にそうしているのではない。そして不本意の誤りについて  
は、裁判に訴えるのではなく、個人的に教え諭すべきだ。第3に、対話を通してメレ  
トスは、ソクラテスが神そのものを一切信じていないと言うが、実際にソクラテスは  
ダイモンという神を信じているため、メレトスの主張は謎遊びになってしまう。
- <sup>4</sup> 高津春繁訳、岩波文庫、岩波書店、1977年、14頁。
- <sup>5</sup> 『ソクラテスの弁明』に続く『クリトン』では「大切にしなければならないのは、た  
だ生きるということではなくて、善く生きるということなのだ」(48B)という言明も  
見られる。またプラトン唯一の言語論的対話篇である『クラテュロス』では、万物流  
転説で知られるヘラクレイトスの弟子クラテュロスを批判してソクラテスは言う。  
「次のようなふるまいも、十分に分別のある人間のすることではないように思うのだ  
がねえ。すなわち、自分と自分の魂とを世話〔教育〕することを名前に委ねてしま  
い、それら〔名前〕とそれらを定めた者たちを信頼しきって、自分が何ごとかといっ  
しのことを知っているかのように自信たっぷりに主張すること、(…) だがね」  
(440C-D. なお引用文における〔 〕内の挿入句は訳者による)。
- <sup>6</sup> 中傷を理由に訴えられて決定された死刑を、なぜソクラテスは法を遵守して受けいれ  
たのかについては『クリトン』であらためて議論の対象となり、またソクラテスのも  
つ死生観については中期の作品で「魂の不死について」と副題される『パイドン』で  
語られる。『ゴルギアス』においては対話者のカリクレスによって、必要以上に哲学  
を続けることで不正に死刑を受ける結果になることが予示されている (485E-486D)。

- <sup>7</sup> 『プロタゴラス』 329C、『ラケス』 199D、『メノン』 78D、『ゴルギアス』 507B。これら所得のうち、正義・知恵・勇気・節制は、四徳として『国家』で大きく取りあげられることとなる (427D-434C)。
- <sup>8</sup> 例えば、友愛を探究する『リュシス』ではアポリアに終わるものの、探究の過程で友とは「もうそれ以上は他の共に遡ることのできないような源」「最初の友」(219C-D)、善きものではないかと推論されている。
- <sup>9</sup> 中期の対話篇『パイドン』では、ソクラテスが哲学探究に向かったプロセスが語られている。最初に現れたのが「自然研究と言われる学問」(96A)と呼ばれているもので、おおよそここでの自然哲学に相当する。ここでは、生成と消滅に対してさまざまな主張がなされるが、根本的な原因が何一つ示されず、個々の原因しか説明しないと批判されて、ソクラテスは別の方法を選ぶことにしたと語られている。「真の原因とは、すなわち、アテナイの人たちがほくに有罪の判決を下すのを善しとし、それゆえほくのほうもここに坐っているのを善しとし、とどまって彼らの与える罰を受けるのがより正しいと思ったという、このことなのだ」(98E)。つまり、ソクラテス＝プラトンが知りたいのは、「善く生きる」とはどういうことか、という人間の価値に関わることなのである。
- <sup>10</sup> この詩人批判は、詩は模倣にすぎないとして国家構想から追放される、中期『国家』第10巻における有名な批判へとつながっていく。
- <sup>11</sup> 中期『パイドロス』において、まさにゴルギアスたちを指しながらソフィストは以下のように批判される。「彼らは、真実らしきものが真実そのものよりも尊重されるべきであることを見ぬいた人たちだが、一方ではまた、言葉の力によって、小さい事柄が大きく、大きな事柄が小さくみえるようにするし、さらには目新しい事柄をむかしふうに、古くさい事柄を目新しく語るし、またあらゆる主題について、言葉を簡単に切ったり、いくらでも長くしたりすることを発明したのだ」(267A-B)。
- <sup>12</sup> 『国家』では以下のように言われる。「ひとが哲学的対話・問答によって、いかなる感覚にも頼ることなく、ただ言論(理)を用いて、まさにそれぞれであるところのものへと前進しようと努め、最後にまさに〈善〉であるところのものそれ自体を、知性的思惟のはたらきだけによって直接把握するまで退転することがないならば、そのときひとは、思惟される世界(可知界)の究極に至る」(532A-B)。また『パイドロス』において、対話法は分割と総合を組み合わせた方法として捉えられている(265C-266C)。
- <sup>13</sup> 中期・後期に至ると、こうした敵対的な対話者はむしろ珍しくなる。『国家』におけるトラシュマコスがその代表例となるか。これは、好意がない対話者との探究は、真理に近づきにくいという事情があるかもしれない。こうした事情から、プラトンの対話とは、そのスタイルにもかかわらず独我的なものだとする批判を招くことになってしまう。
- <sup>14</sup> 例えば『プロタゴラス』では、プロタゴラスが「ところで、いま取りあげていた問題

だが、これはまたあらためて、君の都合のよい機会をみつけて論じることになろう。  
いまはもう、ほかの用事にかかればならない時間だ」(361E)と提案し、「ええ、そういたしましょう」とソクラテスとの同意が成立し終幕する。

- <sup>15</sup> この他に中期においては『パイドン』72E以降、『パイドロス』148A以降で触れられている。